

河田山と那谷丘陵の終末期古墳



河田山第12号墳の切石積横穴式石室(昭和61年撮影、小松市埋蔵文化財センター提供)

六世紀の終わり頃、三〇〇年にわたって築かれてきた前方後円墳が姿を消す。しかし、古墳の造営はこのあと八世紀まで続き、この時期は古墳時代終末期と位置づけられている。小松市では終末期の古墳が三基発掘されており、北陸におけるこの時期の古墳の代表例として知られている。

東部丘陵で発掘された河田山第一二号墳と第三号墳は切石積の横穴式石室を埋葬施設とするもので、七世紀中頃の築造である。第一二号墳は一辺一五メートルの方墳で、墳丘の前面には二段の列石を設けている。凝灰岩の切石を精緻に積み上げた石室

は、天井部がアーチになるもので、類例は国内になく、朝鮮半島西南部にある陵山里古墳群や宋山里古墳群に求められる。



移築・復元された河田山第12号墳(平成22年撮影)



これらに続き、北陸の古墳時代の掉尾^びを飾るのは、八世紀初めに造られた

那谷金比羅山古墳である。那谷丘陵の南斜面に造られた直径約一〇メートルの円墳で、墳丘は失われていたが、凝灰岩の切石を組み合わせた横口式石槨^{よこぐちしきせつかく}が開口していた。石槨の内部は、長さ約一六四^{センチ}、幅八九^{センチ}、高さ八〇^{センチ}と狭く、一人だけを埋葬するために造った施設であることがわかる。

那谷金比羅山古墳全景(昭和58年撮影、石川県埋蔵文化財センター提供)

同じ形態の石槨



那谷金比羅山古墳の横口式石槨(昭和58年撮影、石川県埋蔵文化財センター提供)

は、大阪府ヒチンジョ西古墳、奈良県高松塚古墳、マルコ山古墳などで見られ、河内飛鳥^{かわちあすか}をルーツとする横口式石槨が南加賀に伝わったものであろう。河田山古墳群の二基と那谷金比羅山古墳に葬られた人物は、いずれも南加賀の首長層と見られる。とくに、那谷金比羅山古墳の被葬者は埋葬施設の構造から見て、畿内と強く関わる人物と推定される。

(三浦純夫)